

研究主題

保健学習の活性化のために

— 養護教諭の特性を生かした保健学習の進め方 —

要約: 子ども達は、様々な喫緊の健康課題に直面している。その課題を解決するためにも保健学習は、重要である。そこで、保健学習をより活性化するための一つの方法として、養護教諭がその特性を生かしながら、担当教諭と協働で授業づくりを行い授業実践した。そのことにより、子ども達の学習内容の理解が深まり、保健学習での学びを自分の生活に生かし、健康づくりに役立てようとする意識を高める学習につながった。

キーワード: 保健学習 健康教育 養護教諭の特性 ティーム・ティーチング 協働の授業づくり

I 主題設定の理由

子ども達は、多くの深刻化する健康課題を抱えている。健康教育は、今日的で喫緊な健康課題を解決するための重要な教育分野である。

健康教育の中で保健学習はその中核を成すものであり、小学校では「体育」の保健領域として位置づけられている。しかし、保健学習は体育の授業に押されがちで、“低迷している”という見方をする者もいる。

保健学習の内容は、すぐに生活に活用できるものが多く、生きる力に直結するものでもある。自分の健康に興味・関心をもち、行動変容を促すものとするためには、まず保健学習の確実な実施と指導法の研究が必要であると考ええる。

養護教諭の医学・栄養学・心理学などに関する専門性と「保健室の先生」という子ども達もつ特別な思いを保健学習に生かすことで、活性化が図れるのではないかと考えた。特別な思いとは、養護教諭が子ども達の身体を通して、その心にふれることで生まれてくるものと捉え、それを養護教諭の特性とした。

また、養護教諭を含む教師集団で保健学習の教材や指導法の研究がされれば、高め合い積み上げていくことができ、広がりをもった保健学習が実践できると考えた。そのことにより、保健学習が活性化し健康課題に効果的に関わるなど、子ども達の健康に貢献できると考えこの主題を設定した。

II 研究の目的

1. 養護教諭の特性を明らかにし、その特性を生かした保健学習の効果的な進め方について探る。
2. 養護教諭の専門性を生かした学習内容や教材の工夫を行う。
3. 養護教諭と担当教諭が協働で教材研究を深める過程を大切に、保健の授業づくりを行い、その保健学習のモデルを提案する。

III 研究の方法

1. 養護教諭の特性の分析

- (1) 養護教諭の職務からの特性を文献により分析する。
- (2) 子どもの視点からみた養護教諭のイメージをメタファ調査で明らかにし、そのイメージを特性として捉える。

この2つの分析から養護教諭の特性を捉える。

2. 研究の仮説をたてる。

3. 担当教諭との協働の授業づくりを実践し、仮説を検証する。

IV 研究の内容

1. 養護教諭の特性

(1) 文献から探る特性

養護教諭は、保健室という空間を有し自校の子ども達の心身の実態を最前線で把握できる立場にある。このことは、保健室の機能や養護教諭の専門性を生かして職務を行っているということであり、それに関わって、友定¹は、倉橋²の言葉を引用し養護教諭の特性を「生活的・全体的・自立的・積極的・個別的・家庭的であり、身体を通してその心にふれること」と述べ、藤田³は「職務の基本構造としての三機能『守る・教える・育てる』のない合わせによって固有の活動とすることができ特性と言える。」と述べている。これらのことから、身体を通して子ども達の心にふれることで、親和性が形成されやすいという特性があると捉える。

(2) メタファ (metaphor) 調査から探る特性

調査票は、かほく市内3校の5・6年生407名に配付し、有効回答人数は、396名であった。メタファ調査は、言葉遊びの感覚で、あるものを“喩えたもの”“喩えたわけ”で記述させ、そこからイメージを得るというものである。

*子どもの回答の例
 ◇保健の先生は(おそうじ)のようだ。
 そのわけは、(私たちをすっきりさせてくれるから)。
 ◇保健室の先生は(水)のようだ
 そのわけは、(枯れたお花を元気にするから)

回答は、KJ法によってまとまりのある11のカテゴリーに分類し、全体の傾向、養護教諭との学習経験別(保健学習・保健指導を含む)、来室頻度別にまとめた。

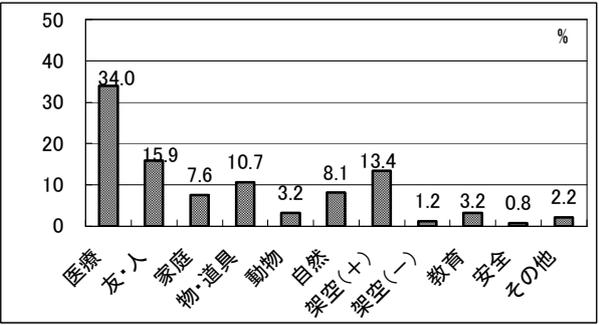


図1 「喻えたもの」

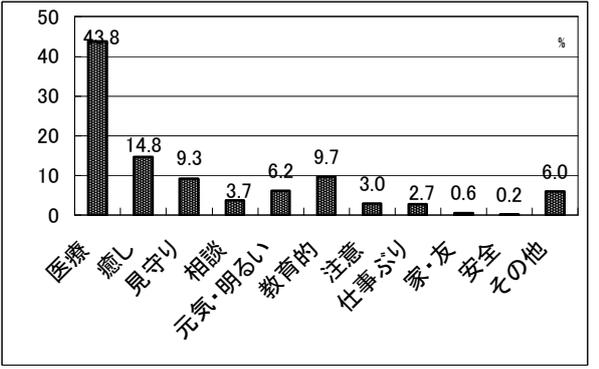


図2 「喻えたわけ」

喻えたものでは「医療」のイメージが多く、次いで「友・人」「架空+」「物・道具」「自然」と続いた。喻えたわけでは、「医療」が多く、「癒し」「教育的」「見守り」「明るい・元気」「相談」と続いた。養護教諭との学習体験別集計や来室頻度別集計の結果から、養護教諭との関わりがある児童ほど、「母」など自分と近い関係の人に喩えやすく多様なイメージをもっていることがわかった。

そこで、養護教諭独自の専門性から日常の子どもの心身の問題を把握し、その課題解決のために、子ども、教職員、保護者等、関係者と多様な連携をとることを特性と捉えた。

また、メタファ調査の「喻えたわけ」では、「医療」「癒し」「教育的」「見守り」などのカテゴリーに属するものが多く記述されていた。保健室などで子ども達が養護教諭と関わることで形成された「喻えたわけ」や文献から、「安心感」「親和性」という表現でまとめ、特性として捉えた。

文献やメタファ調査から、養護教諭の特性を以下

のように捉え、図3のように図式化した。

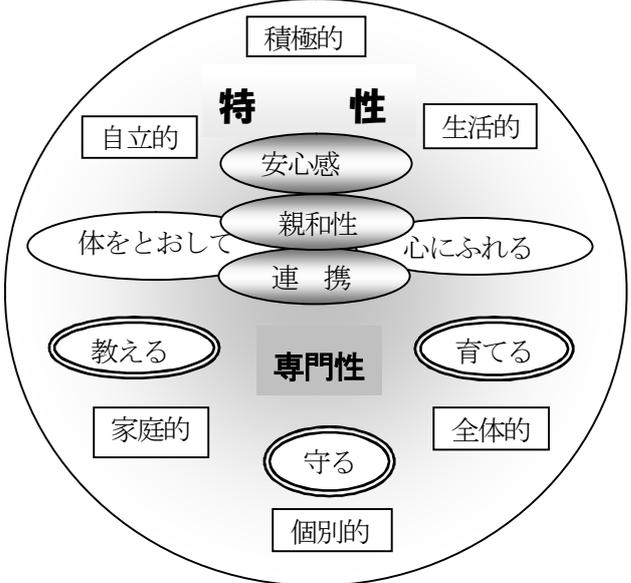


図3 養護教諭の特性

2. 仮説

〈仮説〉

子ども達の健康問題の最前線にいる養護教諭が、その特性を生かし、子ども達との関係性を大切にした保健の授業づくりを行う。そして、担当教諭と連携をとりながら、授業実践することで、保健学習が活性化し、子ども達が自分の現在や将来の健康づくりに前向きに取り組む意識が高まるだろう。

〈作業仮説〉

- (1) 授業モデルを提案し、教材開発を行えば子ども達の学習内容の理解が深まる。
- (2) 養護教諭の視点を生かした保健学習を行えば子ども達の健康観が育つ。
- (3) 学習内容と保健室経営の連携によって、学びの評価や補充指導ができる。
- (4) 学校内の連携を図ることで保健学習が活性化する。
- (5) 学校保健委員会で、学びを発展させる仕組みを工夫すれば、保護者や地域に広げる取り組みができる。
- (6) 保健学習において、担当教諭との協働の授業づくりで、指導者相互の連携・研鑽を積むことができる。
- (7) 保健室での受容的共感的対応を保健学習に生かせば親和性が深まり、学習に取り組みやすくなる。
- (8) 保健学習での関わりを保健室経営に生かせば親和性が増す。

3. 授業実践Iからの考察 【5年・けがの防止】

養護教諭は学級担任と関わりを深めながらティーム・ティーチングの授業づくりを進めた。昨年の実践時の評価から工夫・改善を図り、養護教諭の特性を生かした、効果のある関わり方を探るため下記の2つの指導方法を設定した。

- A) 養護教諭が関わる課題解決型学習
- B) 養護教諭が関わるレクチャー中心型学習

Aでは、グループ活動中、養護教諭が話し合いに合わせ、実際のけがの様子やその時の手当てについて共感的に関わった。

骨折のグループ



骨折経験のあるRが、けがの状況や手当てについて話し、肘を固定し痛みが軽減したことや、まわりの人に励まされたことなど、肘の固定をやってみながら、養護教諭も交えて話し合う。

子ども達が経験した「けが」で考え出された手当ての内容を、養護教諭が科学的根拠や実際の手当ての方法を示しながら支援した。

Bでは、普段保健室で見られる誤った初期処置方法を担任が寸劇で再現し、学級全体でのやりとりの中で処置の適切な方法や改善点を話し合い学んだ。両方の学級とも、子どもたちの興味・関心は高く熱心に学習した。中学校で扱う「R (Rest) I (Ice) C (Compression) E (Elevation)」の処置を“冷静高圧”という漢字のもつイメージで手当ての仕方にあてはめ、“手当ての四字熟語”として表現した。学習後の子ども達の感想には“冷静高圧”の記述が多く“手当ての四字熟語”への関心の高さを示した。また、保健室に授業に関する情報を掲示し、さらなる定着を促した。

また、授業実施後、子ども達の初期手当ての仕方に改善が見られたかを知るため、保健室で養護助教諭が行動化調査(5月~10月)を行った(図4)。

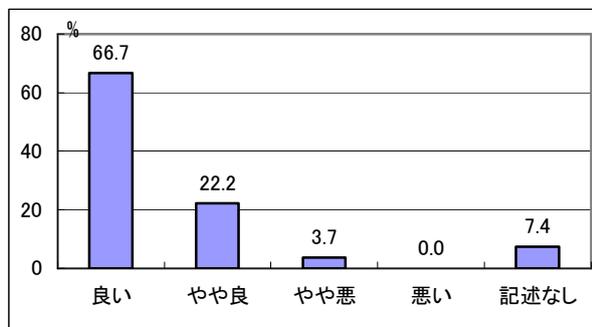


図4 処置の行われ方のレベル

Aの実践では、「小学校保健授業の教授-学習過程評価票」(形成的評価)で分析した結果、4項目中の2項目「認識」と「興味・関心・意欲」において3点満点中、

2.8点という高い得点が得られた。

養護教諭が子ども達とコミュニケーションを深めながら行う課題解決型学習は、子ども達の興味・関心・意欲や認識を高めやすいことがわかった。課題解決型の学習の方法をとり、子ども達との、授業づくりや学習全体に関われば、より効果的に保健学習が行われるようになると思う。

4. 授業実践IIからの考察 【病気の予防】

小単元の「たばこの害と健康」を重点的に学ぶことで、検証可能性が期待できる授業モデルの実践を行った。

A) たばこの害を中心にした展開

B) 社会的要因を中心にした展開

養護教諭が関わる学習で効果のある方法を探るため養護教諭の医学的知識を生かした内容Aと、保健行動と社会的要因を学ぶ内容Bの2つの展開方法で実践した。

子ども達は、「たばこは体に悪い」という漠然とした知識しかなく、知識を明確にするためには、たばこの成分がどのように体に影響を与えるかを理解させることが必要である。また、害を認識しただけでは、将来の喫煙防止に十分に役立つとは考えにくく、社会的要因に触れた学習が必要である。

そこで、Aでは、デジタル教材を作成し、一酸化炭素の体に及ぼす影響を理解しやすいように、アニメーションで表現するなど工夫し、内容を充実させた。また、たばこお菓子のパッケージ比較を行い、パッケージの色づかい警告文の意味、含まれている材料・成分、文字の配置など気づいたことを話し合わせた。

子どもが考えた「たばこのパッケージ」

たばこの害をアピールした、パッケージをつくろう!

【条件】パッケージのデザインを考案して、警告文の作成。警告文は、今年の学習内容から自分で考えたものにする。警告文やパッケージの色を考案し、誰かから褒められるか考えてみよう。タバコやシガレットなど禁煙しよう。

【作業】

工夫したところは、

工夫したのは、一番言いたいことを大きく書いた点です。どんな物質にどんな害があるかを書いたところです。

工夫したのは、どんな害かを書いて、問いかけを入れたところです。

その過程で養護教諭と担任は、活動に加わり、話し合いが深まるように、支援したり問い返しの発問をしたりして関わった。この活動では、子ども達は、他国の警告表示と比較して警告文の内容や、パッケージの表示の仕方などから、たばこに関する規制や日本のたばこ対策などについて学び取ることができた。これら学習したことをもとに、自分でたばこパッケージを作成し学びをまとめ、体に及ぼす影響や問いかけ文、子

もへの配慮などをパッケージに書き込んでいた。楽しさの中にも真剣さがみられる学習となった。

Bでは、デジタル教材でたばこが体に及ぼす影響について簡潔に説明し、「喫煙の誘いを断るロールプレイング」を中心に学習を展開した。その後「こんなに体に悪いたばこをどうして吸い始めたのだろう。」と問いかけると、子ども達は様々な考えを出し合い、「誘われたら吸ってしまうかもしれない。」という意見が出てきた。そのことから「先輩から、たばこの誘いを受けたらどうするか。」という内容のロールプレイングをした。「先輩との人間関係を壊さないように断わるのは難しい。」「先輩でもだめなことはだめだから、しっかり言いたい。」などの感想があった。はじめは簡単に断れると答えていた子ども達も、ロールプレイング後には、断ることの難しさを感じ取っていた。

この学習での、「小学校保健授業の教授-学習過程評価票」の分析では、両方とも「認識」において高い得点が得られ、特にAでは、3点満点中、2.9点であった。

Aでは、パッケージ作成でたばこが体に及ぼす影響の認識や自己学習が高まり、「もっと学習したい」などの探求心を高めることができた。

筆者のこれまでの経験では、子ども達は喫煙に関する学習結果を、身近な家族の喫煙に意識を向ける傾向がみられたが、Bでは、ロールプレイングを行ったことで、自分のこととして捉え、考えていることがわかった。

②いいです。
④吸いたくないです。
⑥未成年だし、吸いたくありません。



①ねえ、たばこ持っているの！いっしょに吸わない？
③そんなこと言わないでスッキリするのよ。
⑤大丈夫よ。ほら、取って！

養護教諭とのロールプレイング：目を合わさないように話す工夫をしたKは、その後の感想に「断るのは、想像以上に難しかった」と書いていた。

5. 学校保健委員会からの考察

子どもが気づいているたばこ環境「車内の喫煙」「レストランの禁煙席」を子ども達の側から、提示することで、子ども同士の気づき、大人と子どもの学び合いを生み出した。その問題に関心のない子に気づきを促し、新しい意識を芽生えさせたりすることができた。

また、この活動では、PTA研修部が、保護者にアンケート調査を行った結果を発表した。保護者自身の喫煙防止教育や敷地内禁煙に対する意識にも変化を与えることができた。養護教諭が、子どもや保護者・地域と連携しコーディネートしたことで、学校と家庭の双方向の学びが展開できた。

V 成果と課題

1. 養護教諭の特性を保健学習に生かした

実践後、「養護教諭と行う保健学習についてアンケート調査」の結果、調査項目の感想・要望を除く14項目全てについて半数以上の肯定的回答が得られた。特に「保健の先生は、自分達の体のことをよく知っている人なので、一緒に学習するのはよい」(91%)「安心感がある」(73%)という回答であった。また、これまでよりも保健室に行きやすくなったり、養護教諭を身近に感じるようになったり、話しやすくなったという回答もそれぞれ約60%みられた。養護教諭は、保健室での関わりから子どもの体を通して心にふれるということを通して、安心感や親和関係を培っていると考えられる。これらの特性を実際の学習の中で生かしたことで、学習効果が得られたと考える。養護教諭が保健学習に参加することで、その後の保健室経営にもメリットを生む可能性もあることがわかった。

2. 担当教諭との協働の授業モデルを作成した

担当教諭と養護教諭が連携しながら、協働で授業づくりを行った。その中で、養護教諭の専門性を生かし、学習の内容や、子ども達につけたい力、指導の工夫など話し合いの過程を大切に授業づくりをすることで、お互いの意識を高め合うことができ、保健学習の授業実践に改善や新しい指導の工夫を生み出すことができた。こうした積み重ねが、保健学習を活性化することにもつながると考える。子ども達のニーズや発達段階を考慮し、保健学習をもっと価値のある学びをするため、課題のもたせ方や教材の工夫などさらに深く研究を進めていかなければならないと考えている。

3. 連携をとりながら、学びを深め広げた

養護教諭が、保護者・学校医・学校歯科医・学校内の教職員と連携をとりながら、保健学習での学びを、学校保健委員会で深める活動を行った。保健学習で学んだ内容を、子ども達の視点で捉え、児童が企画・推進し、健康課題について保護者を含めて考え、話し合う機会をもつことによって保健学習の内容をさらに、深め広げることができた。地域・家庭・学校などをつなぎ、全体をコーディネートしながら、活動することは保健学習や健康教育全体を活性化することに有効に働くことがわかった。

今後は、課題となった点をさらに改善し、実践を積み上げると共に、日常の保健室経営において養護教諭の特性を磨き保健学習に生かしたい。

参考文献

- 1 友定保博 「学校保健のひろば」
- 2 倉橋惣三 東京女子高等師範学校教授
- 3 「養護教諭の地平」藤田和也 東山書房

